



幕張小と恩師へのノスタルジア

作家 近藤 節夫

戦後間もない1949（昭和24）年9月、いがぐり頭の私たち兄弟4人は、揃って幕張小へ転入して来た。幕張での生活は、父親の転勤に伴い京都市内へ転出するまでの僅か3年に過ぎなかったが、好奇心旺盛な腕白少年はこの地でのびのびと育った。その年の秋、湯川秀樹博士が日本人として初めてノーベル賞を受賞した明るいニュースこそ伝え

られたが、日本はまだ戦災から立ち直れていなかった。50年6月には朝鮮動乱が勃発した。

卒業までの1年半の間、ご指導いただいたのは、「ポンチ」と慕われた熱血漢の湯浅和先生だった。先生は教え子に愛情を持って接し、校長室内に掲額された難解な書画「温故知新」の意味を小学生にも分かるように一字一句丁寧^でに説明され、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を抑揚ある語り口で朗読してくれた。時には朝鮮動乱についても熱っぽく話された。

中でも情操教育の野外学習では、田圃の畦道で戯れながら学ぶ俳句や写生は、無性に楽しかった。卒業後も毎年版画の年賀状や、時節の文を交換して先生との交誼は、今生のお別れの場まで続いた。

当時のクラス仲間とは今でも親睦会「和会」を開いては、在りし日のポンチを偲んでいる。伝統ある幕張小で素晴らしい恩師に巡り合い、お世話になった一年半の歳月は、私には終生掛けがえのないひとときとなった。

「幕張」と言えば、今でこそ国際会議や見本市開催などで、その名は世界中から注目されるようになったが、その当時は垢抜けない田舎町に過ぎなかった。道路上のあちこちに貝殻が投げ捨てられ、歩くと貝の割れる音がした。デンブンの匂いがプーンと鼻をつくような場所もそこかしこにあった。

それでも70年前のガキ大将には、かつての田舎臭い町の名残は、遊び友だちとの心温まる触れ合いとともに、♪夢は今も巡りて～♪母校と亡き恩師への愛おしいノスタルジアを呼び覚ましてくれる。